

## 川の中の島に住む -- バングラデシュのチョルの生活（フォトエッセイ）

著者	アブー ションチョイ, 高橋 和志, 山形 辰史
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	231
ページ	27-30
発行年	2014-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003328">http://hdl.handle.net/2344/00003328</a>

# 川の中の島に住む

## —バングラデシュのチョルの生活—

写真・文

アブー・ションチョイ  
Abu Shonchoy

高橋和志  
Kazushi Takahashi

山形辰史  
Tatsufumi Yamagata



写真1 雨季には川底に沈む河川敷で、雨季直前に稲の刈り取りをする農民。所有権の確立されていない土地なので、貧困層が移り住んで、乾季の間に農業を行っている（ガイバンダ県シュンドルゴンジ村。2011年4月山形辰史撮影）

### ●水の国バングラデシュ

バングラデシュは水の国といわれる。メグナ川、ジヨムナ川、ポッダ（パドマ）とも書く）川の三大河川がベンガル湾に流れる三角州に位置する。米、ジュートといった、湿地で生産される作物に依存した生活を送っており、主たるタンパク源は川魚である。

川の氾濫は肥沃な土を定期的に運んでくるという恩恵がある。しかし、度が過ぎて洪水になると、人々の生活の場が水没することになる。洪水は、三大河川の河口付近のみならず、その上流でもしばしば発生する（写真2）。

筆者らの調査地であるバングラデシュ北西部のガイバンダ県やクリグラム県でも、雨季と乾季の川の水かさが、かなり異なっていた（写真3、4）。

### ●チョルの成り立ち

洪水が最も大きな問題となるのが、大河川の河川敷と、大河の中に浮き出た中州（チョル）である。河川敷とは、陸地側の川辺のうち、雨季に水没する土地を指す。これに対してチョルは、川の中に残されている土地を指す。川の中に浮かぶ島、ともいえる。



中州という言葉から日本人がイメージする小さいもの（写真5）から、島と呼ぶべき大きさを持った土地まで、多様に存在する。大きなチョルの中心部はそこその高さがあり、普通の洪水では水没しない。したがって大きなチョルは行政区域として認知されている。

### ●チョルでの生活

一般に、貧困層ほど災害に遭遇する確率の高い、危険な土地に住地を選ばざるを得ない。河川敷やチョルでは水辺に貧困層が住んでおり、洪水時には河岸浸食によって家が流されたり、水没したりする（写真6、8）。

ベンガル湾から海辺を襲うサイクロンと異なり、洪水は、じわじわやってくる。サイクロンが一晩で人や家を吹き飛ばす、いわば「急性」災害であるのに対して、洪水は川の上流からゆっくりやってくる「慢性」災害である。洪水はゆっくりやってくる代わりに、一度水が来ると、なかなか引かないので、被害が長期化する。

河川敷やチョルの住民は、自分の住まいが水に浸かったり、流されたりすると、その地を離れて出稼ぎをしたり、NGO等が提供するシェルターに身を寄せることになる。そして乾季になると戻ってきて、稲作（写真1、7）や畑作（トウモロコシや唐辛子など）および

ジュートの刈取りや加工等に従事することになる。

バングラデシュ北西部は、洪水に加えて、モンガと呼ばれる季節的飢餓という問題を抱えている。三期作が可能なバングラデシュでも九月から十一月の期間は端境期で、十分な備蓄がなければ食糧難に見舞われる。

またバングラデシュ北西部は、しばしば寒波に襲われる。この地域は、実はブータンやネパールに近い。バングラデシュ北西部の中心であるロンプール市内から、ブータンおよびネパール国境は、それぞれ直線距離で一五〇キロ余りである。したがって、一二月から二月はけっこう寒いのに暖房設備がないので、寒さに馴れた日本人でも辛いものがある。

### ●外部からの支援

洪水によって、食料を始めとする商品の流通が阻害されるので、政府や国際機関、NGOによって食糧支援がなされている。筆者の一人が二〇一二年八月にクリグラム県のチョル・ラジブプール郡を訪れた際、内陸部のガイバンダ県から木船で運ばれた米が陸揚げされ、水牛が引く大八車で郡の各地に輸送されていた（写真9）。

ガイバンダ県やクリグラム県といった洪水多発地域では、バングラデシュで生まれて世界中に広



写真2 ガイバンダ県とクリグラム県の間を流れるジョムナ川。海かと思うほどの川幅である（2011年8月山形辰史撮影）

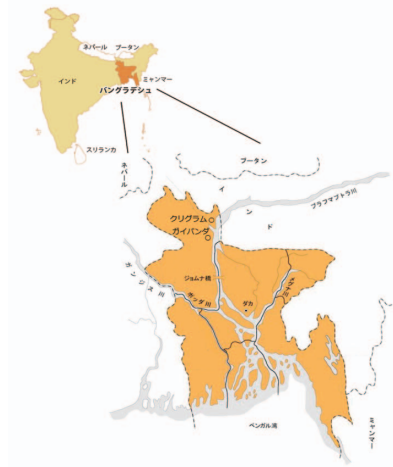


写真4 写真3と同じ場所から撮影した、雨季直前のガゴット川。水が完全に引いて、川底が現れている（2011年4月、山形辰史撮影）



写真3 ガイバンダ市内のガゴット川。水運のために便利に用いられている（雨季：2011年7月、山形辰史撮影）





写真5 小さい Chol (中州) (2011 年、山形辰史撮影)



写真6 ジョムナ川の氾濫によって浸食された土地。もうちょっと浸食が進むと、この家も流されてしまう。(2012 年、アブー・シヨンチョイ撮影)



写真7 乾季に利用可能となった河川敷を灌漑して稲作をする。写真は揚水ポンプから蛇のように長く伸びたホース (2011 年、山形辰史撮影)



写真8 完全に水に浸かった家屋 (2011 年、山形辰史撮影)

まった、マイクロファイナンスのパイオニアであるグラミン銀行や、マイクロファイナンスの規模では国内最大といわれる NGO の BRAC (バングラデシュ農村向上委員会) でさえ、活発に活動してはいない。というのは、これらの非営利団体が提供するマイクロファイナンスのやり方が、この地域の実状にあっていないからである。

例えば初期のグラミン銀行のマイクロファイナンスは、借り手が毎週欠かさずミーティングに出席し、その場で利子を返済することを原則としていた。このような原則は、洪水で何カ月か水没するような地域では適用できない。つまりこの地域は、バングラデシュの非営利団体にとってさえ、展開が困難な場所なのである。

## ●地元の NGO

バングラデシュ北西部地域においてこれら大手の非営利団体より目立つのは、ガイバンダ県やクリグラム県を含むロンプール管区に根差したローカル NGO である。その代表としては SKS (コミュニティ福祉協会)、TMS (テングマラ女性・若者協会)、RDRS (ロンプール・ディナジプール地域サート) および GUK (大衆開発センター) がある。

そのなかで、筆者らが研究協力相手として選んだのが GUK である。GUK はガイバンダ出身の M・A・サラム氏が一九八五年、地域開発のために立ち上げた NGO である。イギリス政府、オーストラリア政府、EU、国際 NGO の OXFAM 等から資金を得て、活動して

いる。スタッフの数は約九〇〇人である。

## ●家畜移転と太陽光発電

GUK のプログラムのひとつに、家畜移転プログラムがある。これは GUK が住民に乳牛や山羊、鶏を与え、生まれた子牛、子山羊、ヒナで返済するプログラムである。借り手は、牛や山羊の乳、鶏の卵で収入を得ることができる (写真 10)。他のマイクロファイナンス機関が活動を控えるなか、Chol 住民に対して、貴重な生計向上の機会を与えている。

また、GUK は、太陽光パネルを供与するプログラムも Chol で実施している。Chol では電線が張れないため、住民は灯油ランプやロウソクを利用している。しかし、





写真 10 ガイバンダ県やクリグラム県を中心に活動する NGO の GUK (Gana Unnayan Kendra: 大衆開発センター) が実施している、家畜移転プログラムの一環で与えられたヤギ (2012 年、山形辰史撮影)



写真 9 洪水の被害を受けた住民のため、チヨルに届いた食糧援助の米 (2012 年、山形辰史撮影)



写真 11 NGO の支援によって導入された太陽光パネル (2013 年、アブー・シヨンチョイ撮影)



写真 12 日中、太陽光パネルによって蓄えた電気を使って夜に勉強する児童 (2014 年、GUK・アジア経済研究所調査チーム撮影)

それらは割高であるとか、煤煙の影響による呼吸器疾患を起こしやすい、といった問題を抱えている。安価で安全な太陽光電気を利用することで、家計負担の軽減や健康改善に加えて、子どもたちが夜でも電気の下で勉強することができるようになるなどの効果が期待されている (写真 11、12)。

### ●おわりに

チヨルに住む女性や、ヨーロッパで開催された気候変動の国際会議に招待されて、その生活の困難を訴えたところ、ドイツの NGO から、ドイツへの移住を勧誘されたという。「そんなことを求めているんじゃないのよ」と彼女はいう。彼女はチヨルでの生活を愛しているのだ。灌漑や家畜の飼育、太陽

光発電といった手近な改良を通じて、生活改善をしたい。そんな思いを後押しするのが、我々にできることなのだろう。

(Abu Shonchoy / アジア経済研究所 ミクロ経済分析研究グループ、たかはしかずし / 同 ミクロ経済分析研究グループ、やまがた たつみ / 同 国際交流・研修室)